

## 研究ノート

# 伝統技法「のた絵」を現代的にアレンジしたテーブルウェアのデザイン開発

山田 圭\*<sup>1</sup>、長田貢一\*<sup>1</sup>

## Development of Tableware Using Traditional Technique Arranged Modern

Kei YAMADA\*<sup>1</sup>, Koichi OSADA\*<sup>1</sup>

Tokoname Ceramic Research Center\*<sup>1</sup>

常滑焼伝統技法「のた絵」を現代的にアレンジするとともに簡略化し、テーブルウェアに施すことにより、新規な製品の開発、購買層の拡大、販路の拡大を狙った。素地は鑄込み締土と基礎締土からなるブレンド土を用い、顔料により色彩の調整を行った。試作品の形状は、「のた絵」を活かすため大きなリムを持つ特徴的な形状とした。絵柄については、北欧風な絵柄、ファッションデザインの要素を用いた絵柄など、シンプルかつ大胆なものを採用し、絵筆の代わりにスポンジを用いて彩色するなど、高度な技術を必要としない手法で行った。

### 1. はじめに

常滑産地には古くから伝わる伝統技法がいくつもあり、それらを用いた製品は非常に製品価値が高く、高価である。しかし、伝統技法を用いた製品は伝統的な素地・形状・デザインであるため、購入する消費者が限られるなど、なかなか産地の活性化に結びつかない。このため本研究では、伝統的な技法を用いながらも現代的な感覚に合ったアレンジを施すことにより、購買層の拡大を狙うものである。

本年度は伝統技法「のた絵」を採用した。「のた絵」は他産地の絵付けに見られる透明釉を使用しないため、独特の風合いを持っており差別化に有利である。しかし、高度な筆使いが求められるため「のた絵」を採用するメーカーは少なく、他産地と同様の素材、技法で製品作りを行っているのが現状である。本研究では、高度な筆使いを必要としない技法を提案するとともに、現代的な絵柄を現代的な形状のテーブルウェアに施すことにより、新規な製品の開発、購買層の拡大、販路の拡大を狙う。

### 2. 実験方法

#### 2.1 常滑焼伝統技法「のた絵」

一般的な陶磁器の絵付けには専用の絵具を用いるが、この絵具自体は強い皮膜を形成しないため、絵具を透明釉で覆ったり、焼成により透明釉と接合したりして保護する必要がある。前者のような、素地に直接絵付けを施して透明釉で覆うものは「下絵付け」、透明釉を掛けて本

焼成したものに絵付けをし、再度焼成を行うものは「上絵付け」と呼ばれ、他産地の絵付けはこの2種類に大別される。

一方、常滑産地の「のた絵」は、絵具は一般的な陶磁器用絵具ではなく、器体に用いる素地に水を加えて泥状にした「のた」に顔料を添加したものをを用いる。この「のた」で描かれた絵は焼成によって器体と一体化するため、透明釉で保護する必要が無く、従来から透明釉を用いない有色せつ器による茶器製品等には極めて適した絵付け技法であると言える。

また、釉薬成分により絵が流れたり変形したりしないため、伝統工芸士や職人は腕の見せ所と言わんばかりに好んで精緻な絵を描く傾向がある。

このように、「のた絵」を施された製品は独特の雰囲気を持ち、世界的に見てもあまり例が無いものである。



図1 「のた」による絵付け（左）と製品（右）

\*<sup>1</sup> 常滑窯業技術センター 材料開発室

## 2.2 素地の選定

「のた絵」は茶器、花瓶など、常滑産地独特の有色せつ器を用いた製品に施される。このため素地には有色せつ器である鑄込締土、基礎締土によるブレンド土を用い、顔料を添加することにより色彩を調整した。鑄込締土は淡茶色、基礎締土はアイボリーの素地色であり、明度、彩度を必要とする場合は基礎締土の比率を高め、明度、彩度を必要としない場合は成形性を優先し、鑄込締土の比率を高めたものを用いた。このブレンド土を水で溶き、顔料を多めに添加して「のた」を調整した。

## 2.3 技法及び絵柄のアレンジ

伝統工芸士や職人による高度な技術を用いた「のた絵」であるが、一般のメーカーにとって最も大きな障壁となるのは筆使いである。これは長年の技術の蓄積によるものであり、一朝一夕には真似できないものである。本研究では、のた絵の経験が無いメーカーでも容易に取り組めるようにすることを目標としているため、筆の代用としてスポンジを用いて絵を描くことを提案した。これにより、これまでの「のた絵」にはない大胆で勢いのある絵が表現可能となった。スポンジを用いることで細密な絵は描けなくなるが、北欧のインテリア織物メーカー、食器メーカーが好んで用いるような大胆な柄、ファッションシーンで昨シーズンから今シーズンにかけて流行している迷彩柄や動物柄は表現可能である。

## 3. 実験結果及び考察

### 3.1 器の試作

皿は「のた絵」を効果的に見せるためリムを大きく取り、リムを湾曲させることで優美さを表現している。食べ物を入れる器部分の凹形状と、リム部の凸形状の切替が特徴的なデザインである。

凹凸の切替箇所敢えて段差を作ることで食品が止まり、スプーン等で掬いやすくするとともに、スプーン等がリムの絵部分まで行かないよう止めるという目的を兼ねている。



図2 容易に成形できる角皿

図2の角皿は、手作り感を簡易に表現することを考慮して試作したものである。ロクロ成形で筒を引き上げ、変形させたものを切り開き、側面を処理した。瀬戸・美濃産地に見られる織部の俎板皿のような作りが容易に作成できる。

### 3.2 絵付け

絵付けはスポンジ、丸筆を用いた。スポンジは密なもの、気泡が多くある粗いものがあり、粗いものは手で千切るなどして先を不均質にすることにより、掠れが容易に表現できる。(図3参照)



図3 スポンジを用いた絵付け

### 3.3 試作

試作品を図4に示す。



図4 試作した皿

## 4. 結び

高度な技法による緻密な「のた絵」ではなく、スポンジで容易に表現できるカジュアルな柄を用いたテーブルウェアのデザイン開発を行った。この技法は「のた絵」の経験が無いメーカーでも容易に取り組めるものである。また、食器メーカーのみならず、テキルタイルメーカー、ファッションシーンなどに用いられる絵柄を参考にすることにより、ターゲットとする購買層の嗜好に合うデザイン開発ができた。特にファッションシーンの情報を絵柄に利用するデザイン開発手法は、ターゲットとする購買層を絞り込む上で非常に有利な手法である。